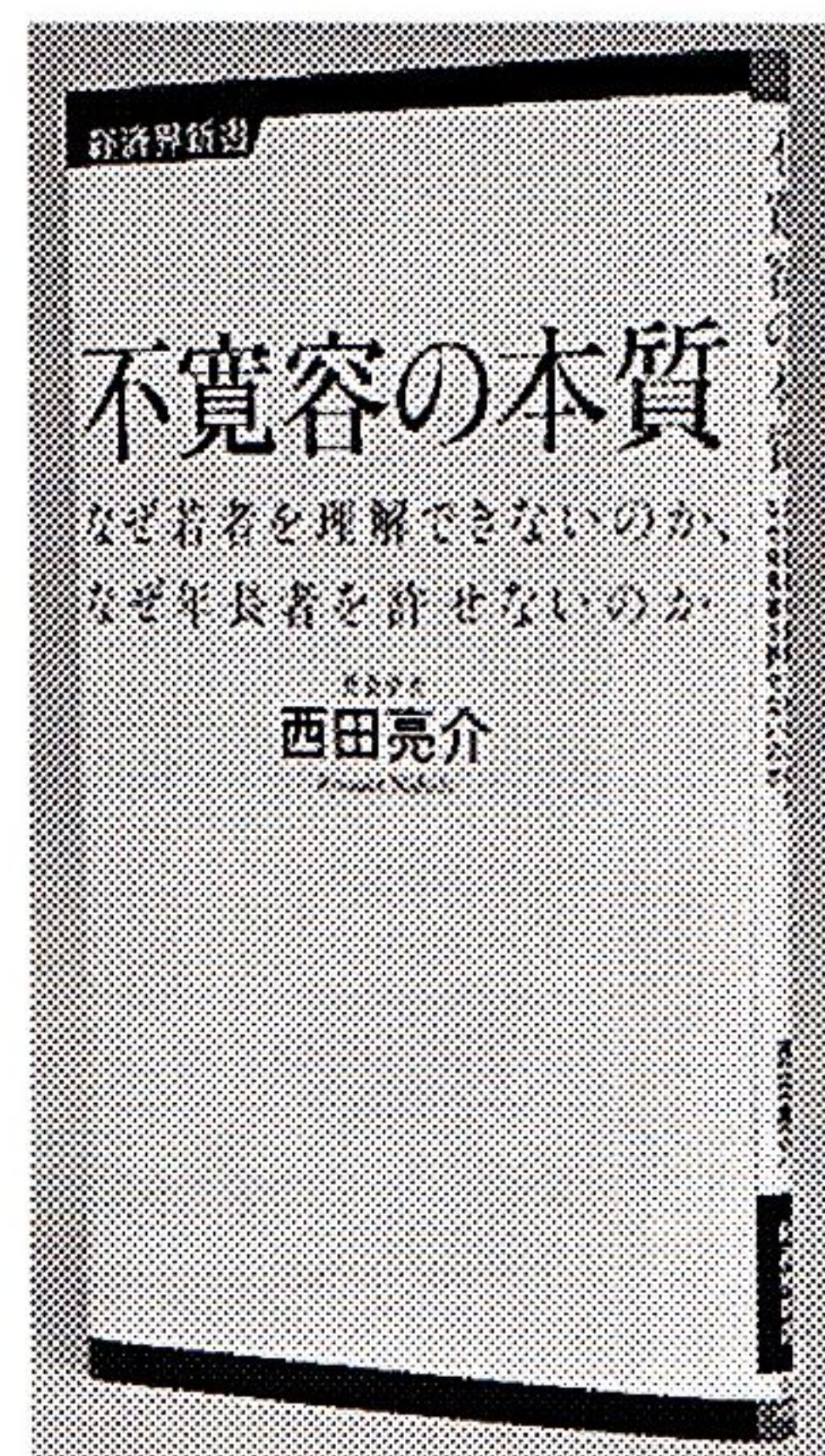


不寛容の本質



(経済界・864円)

よしだ・りよ
うすけ 東京工
業大准教授。専
門は公共政策の
社会学。著書に
『メディアと自
民党』など。

昭和という激動の時代が幕を閉じ、平成に入って30年が過ぎようとしている。高度成長は過去のものとなり、「失われた20年」と呼ばれるほど経済は停滞している。私たちの社会は確実に貧しくなっており、対立と分断が進行している。人種差別やネットでの誹謗中傷など息苦しさを感じることにも少くない。この社会を覆う不寛容さは何なのか、それが本書の問いである。

本書は不寛容の本質を「昭和の面影」に求める。昭和とは「みんな一緒」の世界であった。価値観や選択の自由度は少ないが、その代わり「安定」と「成長」を享受することができた。それに比べ現代

では、価値観は多様化し選択の幅も広い。「自由」と言えばその通りだが、絶えず「競争」に晒されている。ここに現実と認識の乖離がある。社会の現実には「自由」と「競争」であるにも拘わらず、私たちの認識は依然として「安定」と「成長」を志向している。本書の題材は、経済システム・若者の政治意識・リーダー論・少年犯罪と社会復帰・高等教育などである。安定時代に構築された社会基盤が自由競争に晒され、脆弱化し、機能不全に陥っているという点で共通している。不寛容の本質とは、「昭和」を追い求めながらもそれが失われてしまったことへの苛立ちなのか

もしれない。

このジレンマを端的に表しているのが、未来への投資を構想する「イノベーター」と今日の生活を守ろうとする「生活者」の対比である。競争を勝ち抜くためにはイノベーション(革新)が必要である。しかし、私たちすべてがイノベーターになれるわけではない。恩恵を得られるのはごく一部である。問題は年長者と若者の世代間対立ではなく、「安定」を自明とするか、「競争」を追求するかという構造的な対立である。安定と成長の時代に戻ることは難しい。しかし、自由と競争だけでは社会の基盤は維持できない。私たちは「安定」と「競争」という二つの極の間で、「選択肢の豊かな社会」を模索しなければならぬ。その構想のヒントが本書にはある。

(九州大准教授 大賀哲)